

たろばな 京都大学女性研究者支援センター Center for Women Researchers

シンポジウム シリーズ 私の仕事とキャリアデザイン7 「京都で研究する！—外国人研究者が語る京都大学での経験」

第7回となるシンポジウム「シリーズ 私の仕事とキャリアデザイン 京都で研究する！—外国人研究者が語る京都大学での経験—: International Researchers Talk About Their Experiences at Kyoto University」を開催しました。大学内外のグローバル化の動向を踏まえ、今回は英語で全プログラムを進めました。講演者のスワン・ジュンウィチャン (Supawan JOONWICHEN) 氏は、タイ王国出身で、本学で博士号を取得後、東北大学大学院金属材料研究所ポスドク研究員 (NEDO プロジェクト) を経て、名古屋大学大学院工学研究科マテリアル理工学専攻で産官学連携研究員をされています。もう一人の講演者ジェーン・シンガー (Jane SINGER) 先生は、記者、編集者を経て、京都府議会議員であったパートナーと二人のお子さんを育てながら、研究者へとキャリア形成し、2010年より京都大学大学院地球環境学堂コミュニティ開発論分野の准教授として勤務されています。今回のシンポジウムでは本学にゆかりのあるお二人に、これまでのキャリア、研究、本学での経験などについてお話いただきました。

司会進行は、講演者のジュンウィチャン氏の院生時代の指導者でもある山末英嗣・女性研究者支援センター広報WG主査が行いました。はじめに、稲葉カヨ・女性研究者支援センター長より挨拶があり、センターの活動紹介と、お二人の講演者のプロフィール



紹介が行われました。そして、ジュンウィチャン氏より、留学生の視点から「Studying Experience in Kyoto University: Challenges, Lessons, and Future Perspectives」京大で学んだこと、そしてこれから」の講演をいただきました。

ジュンウィチャン氏は、タイのブーラーパー大学 (Burapha University) において化学工学の分野で学士号を、カセートサート大学 (Kasetsart University) で修士号を取得し、プロクター&ギャンブル社に勤務されました。その後、研究を続けたいと考え、日本の文部科学省奨学金に応募して採択され、2008年に本学の博士課程に進学されました。研究分野は、「できるだけ少ない資源でできるだけ豊かな暮らしを提供する為にはどうしたらよいか」ということを研究しているエネルギー社会工学の石原慶一教授の研究室に進みました。留学にあたって心配したことは、大学で友人ができるか、3年間という期限内に博士号を取得できるか、研究だけの毎日に対するプレッシャー、日本人とコミュニケーションできるか、といったことだったそうで、この時のご自身の課題に答える形で講演されました。

まず、博士課程での生活は、学生の関心を尊重する石原先生や山末先生の指導の下、コースワークが2割、自主的な研究活動が8割というバランスでした。氏は、修士課程の講義や興味のある科目を自主的に受講し、自分のペースでオリジナルな研究テーマを見つけ、3年間に国内外の9つの学会大会に参加し4本の論文を発表されました。振り返ると、1年目は、オリエンテーション

KYOTO UNIVERSITY
Center for Women Researchers

SYMPOSIUM SERIES: My Work and Career Design 7

International Researchers Talk About Their Experiences at KYOTO UNIVERSITY

Friday, July 19, 2013.
16:00 - 18:00 (Doors open at 15:30)

**Shirankaikan Annex 2F,
Seminar Room 2**
11-1 Ushinomiya-cho, Sakyo-ku, Yoshida, Kyoto.

Event Details
International researchers speak about their studies, life, career paths, and challenges of Kyoto University to share their experiences with participants.

Supawan JOONWICHEN Researcher
Department of Materials, Physics and Energy Engineering,
Graduate School of Engineering, Khon Kaen University.
**Studying Experience in Kyoto University:
Challenges, Lessons, and Future Perspectives**

Jane SINGER Associate Professor
Resource Governance and Participation Development,
Graduate School of Global Environmental Studies, Kyoto University.
**Considering a Non-linear
Approach to an Academic Life**



This event is free and open to the public

Registration
Please pre-register via the online Registration Form: <http://www.cwr.kyoto-u.ac.jp/english>

Temporary nursery care for children of participants at Shirankaikan Annex
The center furnishes temporary child care free of charge for children, 3 months to 1st grade of elementary school from 15:30 to 18:30. Advance reservations are required for the nursery care and the deadline is Thursday, July 11. Please inform us about Name, Sex, Age, and Contact information of your children when you register for the symposium.

Contact Information The Center for Women Researchers, Kyoto University
Tel: 075-753-2487 E-mail: twrc@ipcmail.com.kyoto-u.ac.jp HP: <http://www.cwr.kyoto-u.ac.jp/english>

Organized by the Center for Women Researchers, Kyoto University / Co-organized by Kyoto University Career Support Center, Kyoto University Gender Equity Promotion Office

International Researchers Talk About Their Experiences at

と実験への着手、2年目はデータの収集と論文の発表、3年目はそれらを総合した研究と学位論文の発表というステップだったそうです。

実験でネガティブな結果が出ることに不安を感じることもありました。科学的手法で行われたデータで

すから、それも研究の一部として論文の一つの章にまとめることでクリアされました。Ph.D.取得をめざす学生はまず論文のことを考えて、勇気をもって研究室でコミュニケーションをとることが重要です。その一方、Ph.D.取得は自分のより大きなキャリアの一部であることも忘れず、ゆとりをもった休日を過ごすことも大切であると話されました。

当初の不安とは異なり、研究室ではたくさんの友人を得られたそうです。また、研究室の他にも、本学の原子炉研究所の臨界集合体実験装置でのフィールドスタディに参加し、恵まれた環境で研究活動の幅を広げることができたと感じておられます。そして、これから研究者の道を進む人へのアドバイスとして、基礎理論に関する講義力やスーパーバイザーとしての能力なども身につける必要があるとお話されました。最後に、ネットで配信されている海外の大学のオンライン教材なども利用してグローバルな動向をキャッチする一方、留学してからは「郷に入っては郷に従え」という気持ちで留学国の文化に染まってみることも大事であると強調されました。

次に、京都大学のシンガー先生より、研究者の視点から「Considering a Non-linear Approach to an Academic Life 研究者へのノンリニア・アプローチ」の講演をいただきました。シンガー先生が、初めて日本にいらしたのは1976-77年の大学生の時で、京都でのホームステイや日本語研修をし、東京大学で学ばれました。その時印象



的だったのは、高崎山の猿のヒエラルキーについて観察したことで、日本社会の男性の序列社会と似ていて興味深かったそうです。

大学卒業後は、サンフランシスコでベトナム難民の定住プログラムの仕事をされました。アジアへの関心を深

められた先生は、仕事で得た貯金をもとに9ヶ月間、日本、タイ、マレーシア、シンガポール、インドネシアに行き、また難民キャンプでのボランティア活動にも従事されました。そして、アメリカに帰国し、コロンビア大学国際公共政策大学院に入学、ジャカルタの国連開発計画で4ヶ月のインターンシップを行い、国際関係学の修士号を取得されました。大学院終了後には結婚をされ、東京で12年間、新聞記者、専門誌の編集者として活躍する一方、二人のお子さんの子育てとの両立に励まれました。この時は、両立支援のシステムがまだ整備されていなかったため、とても苦労されたそうです。

京都に移られたのは、京都府出身のパートナーが府議会議員に立候補されることがきっかけでした。家族で京都に転居するため、シンガー先生は、東京での新聞記者や雑誌編集者の仕事を中断されました。日本女性の労働市場に占める年代別統計のM字カーブを先生もご経験されたとお話されました。

そして、1995～2007年まで、先生は「議員の妻」という新しいキャリアを辿られました。地域にとけ込み「後援会」事務所や「婦人部」のマネジメントや広報活動を行い、大勢の人々を前にして日本語でスピーチをする日々を送られました。「ジャージ姿」で奔走される後援会イベントや選挙キャンペーン、支援者の「仲人」をされているシンガー先生のお写真のスライドが紹介され、会場に暖かい笑いが満ちました。



先生はお子さんが大きくなられた頃に、教育研究活動に入られ、立命館大学、京都学園大学で教鞭をとられた後、本学の教員として着任されました。現在、大学院地球環境学堂で「環境倫理学」「環境教育学」「移住と退去」「アカデミック・ライティング」などの講義を担当されています。研究では、3つの科学研究費プロジェクトに従事し、フィールド研究を行い、二冊の本を執筆されています。また、「国際環境マネジメントプログラム」の運営もされていて、オリエンテーション、院生の論文指導、委員会業務、海外での学生募集など多岐にわたるお仕事をこなされています。

先生が代表者を務められる科学研究費プロジェクト「民族性に着目したダム開発による村落移転の影響とレジリエンス評価」では、村落移転がエスニック・マイノリティに与えるインパクトについて研究されています。ダム開発によって移住をさせられる人々は世界で年間1千万人いるとされますが、センシティブな問題に様々な配慮をしながら、ベトナム中部の4つの集落について村落移転の現状と集落の再興に関するフィールド調査がされています。

そのような活動を行う研究者に必要とされる能力と技術には、インタビュー、分析と総合、執筆と編集、プレゼンテーションなどがあり、教員に必要とされるものには、物事を明確に説明し、次世代を理解する忍耐力などがあります。管理者としては、組織やイベントの運営、コミュニケーション力などが必要です。シンガー先生は、大学教員として要求されるこれらの能力と技術を15の項目に分類し、ご自身は、これらを「記者・編集者」、「政治家の妻」、「母親」という3つのキャリアの中でそれぞれ形成されたと振り返られました。大学院からすぐ大学教員へという直線コースではなく、さまざまな仕事と役割の中で、研究者に必要とされる能力・技術を身につける「ノンリニア」なアプローチについて具体的に説明いただき、研究者のキャリアパスの多様性について学ぶ機会となりました。

お二人の講演に続いて、伊藤公雄・女性研究者支援センター推進室長の進行により、質疑応答とディスカッションを行いました。科学の分野でも、ノンリニアなキャリア形成は可能か、また、数年間、専門以外のことをして研究に戻ることは可能かといった質問がありました。ジュンウィチャン氏は、アカデミアのほうが研究の自由度が高く自分の研究に集中することのできる環境にあり、ご自身はこのまま大学で研究を続けたいと回答されました。

また、日本の大学で、「女性研究者であること」と「外国人研究者であること」ではどちらが大変かという質問がありました。シンガー先生は、別々に経験したことはなく、外国人研究者の場合は日本語能力や滞在期間で異なり一般化はでき



ないが、どちらかといえば外国研究者であることより、学内に女性教員が少ない場合や、特に小さな子どもがいる場合は女性研究者であることのほうがより困難ではないかと回答されました。

女性教員であるシンガー先生を、学生はどのように捉えていると思われますか、という質問もありました。シンガー先生は、フィールドトリップなど、女性教員が引率することで、特に女子学生が安心して喜んで参加しているようだと言われました。フィールドトリップ先の環境は、時には女性には厳しく、トイレのない村に滞在することもあるそうです。メンバーに女性がいればお互いに助け合うことが出来ます。またアカデミアで女性教員が研究し、さまざまな役割を果たしている姿を示すことが、女子学生へのロールモデルとして、エンカレッジすることになるのではないかとお話をされました。その他にも、奨学金やポストの獲得の仕方など活発な意見交換が行われ、盛会のうちに閉会しました。

(支援室)



女性研究者支援センターは移転しました

女性研究者支援センターは、建替え工事のため、橘会館に移転しました。新施設が完成する平成26年3月まで、橘会館にて業務を行います。旧施設より2棟南にあります。近くにお越しの際は、お立ち寄りください。



保育園入園待機乳児のための保育室

保育園入園待機乳児

保 育 室



2013年9月1日開室 愛称：ゆりかご

- ・開室期間：平成25年9月1日～平成26年3月31日
- ・開室日時：月曜日～金曜日 午前9時～午後0時
(時間外保育は、午前8時から9時/午後6時から8時)
- ・保育場所：京都大学女性研究者支援センター
- ・利用資格：京都大学に所属する女子学生・女性研究者
- ・対象乳児：生後9週目～15ヶ月未満(誕生日)の健康な乳児
- ・定員：9名

詳細は女性研究者支援センターのホームページで！

女子学生、女性研究者の研究と育児の両立を支援することを目的とし、女性研究者支援センター内に、「平成25年度保育園入園待機乳児のための保育施設」を設けます。この保育施設は、自治体に保育園入園申請をおこなったが、入園待ちを余儀なくされている女性研究者等を対象とします。運営は、民間企業に委託し、大学が一部費用を負担して実施します。

<概要>

開室期間 平成25年9月1日から平成26年3月31日

開室日時 月曜日から金曜日、9時から18時

(時間外保育は、8時から9時、18時から20時)

利用資格 原則として京都大学に所属する女子学生・女性研究者

対象乳児 生後9週目から15ヶ月未満の健康な乳児、9名
(15カ月になる月の前月まで利用できます。)

今年度は、センター建替による仮施設での実施のため、スペースの制限上、最大9名の保育となります。

詳しくは、女性研究者支援センターのWebサイトをご覧ください。登録は出産前でも可能ですが、申請は自治体保育園に申し込み後です。



Center for Women Researchers

〒606-8303 京都市左京区吉田橋町
 電話 075 (753) 2437
 FAX 075 (753) 2436
 E-mail w-shien@mail.adm.kyoto-u.ac.jp
 HP <http://www.cwr.kyoto-u.ac.jp/>